アイビー・リーグ
コーネル大学大学院
植物病理学科菌学専攻で
サバイバル

Survival for My Master of Science (M.S.)
in Plant Pathology at **Cornell University**
in Ivy League

「理学修士」取得編

井上　哲 著
Satoshi Inoue, Ph.D

ブックウェイ

アイビー・リーグ
コーネル大学大学院
植物病理学科菌学専攻で
サバイバル

Survival for My Master of Science (M.S.)
in Plant Pathology at Cornell University
in Ivy League

「理学修士」取得編

井上　哲 著
Satoshi Inoue, Ph.D.

ブックウェイ

カユガ湖を望むアイビー・リーグ、コーネル大学
（アメリカ合衆国ニューヨーク州トンプキンス郡イサカ市）
University Photography 提供

Summary　はしがき

◈「何が何でもアイビー・リーグで学位を」という夢を実現したお話

Far above Cayuga's waters in New York アメリカ合衆国ニューヨーク州カユガ湖を見下ろす丘の上で（“Far above Cayuga's waters”はコーネル大学の校歌“Alma Mater”の一節）。今まで誰も書かなかったアイビー・リーグ、創立150年を迎えるコーネル大学大学院教育のディーテイル（詳細）。英語の勉強、出願、大学院生として受け入れられ、植物病理学科でのハードな勉強と少林寺拳法部の活動で体力作りの大学院生生活で「サバイバル」。Master of Science (M.S.)「理学修士」の学位取得まで。

合い言葉は“Yes,I can.”「やれば出来るぞ。」元高等学校教諭がアメリカ留学の夢をかなえ、坪田信貴著『学年ビリのギャルが１年で偏差値40上げて慶応大学に現役合格した話』で紹介された「コーネル式ノート」を生んだ、「アイビー・リーグで最も卒業するのが難しい」と言われているコーネル大学大学院でサバイバル。

私立の学部とニューヨーク州立の学部が混在する世界でも珍しいコーネル大学。世界で最も美しいと言われているニューヨーク州のカユガ湖を望む丘の上に建つキャンパス。コーネル大学と言えば、有名なホテル経営大学院。そんなコーネル大学で世界最強と言えば植物病理学。円高、バブルの頃の90年代アイビー・リーグ留学奮闘記。勉強に追われながらも、風前の灯火だったコーネル大学少林寺拳法部を再興。裏千家インターナショナル・アソシエーション（UIA）会員としてニューヨーク州イサカ市で茶道を紹介。日本人留学生によるコーネル大学「日本文化祭」は大成功！　アイビー・リーグの中でも“The first Americam university”「最初のアメリカの大学」と言われるコーネル大学。高等教育機関である大学院教育は、「かくありなん！」

2015年、Let's celebrate Cornell University's Sesquicentennial.
祝コーネル大学創立150周年、日本植物病理学会創設100周年。

井上　哲
Satoshi Inoue，Ph.D. 1997, Cornell University

留学中に撮影したコーネル大学のキャンパス。“Art Quad”「アート・クワッド」と呼ばれている“College of Arts and Sciences”「文理学部」の中庭。“The First President A.D. White”ホワイト初代総長の座像。向かって右の建物がランドマークの“McGraw Tower”時計台マッグロー・タワーがそびえる人文科学系書籍を中心に収蔵する“Uris Library”ユリス図書館。設備が整った自習室があるので、“Undergrad Library”「勉強図書館」とも呼ばれている。向かって左の建物が社会科学系書籍と貴重書籍を収蔵する“Olin Library”オーリン図書館。図書館はコーネル大学の心臓部ともいえる（個人撮影）。

◆ Dedication

コーネル大学大学院時代の親友故高尾尚二郎君。「君も何か書いてみたら」と執筆を勧めてくれた東北大学の英語の恩師故小田基教授。留学中に他界してしまった祖母新井その、父二三男の二人。コーネル大学留学中に大学のセージ・チャペルで結婚した妻晴美と子供たち。何より母智子に捧ぐ。

最後に　To All Cornellians!

アイビー・リーグ
コーネル大学大学院植物病理学科菌学専攻でサバイバル
Survival for My Master of Science (M.S.) in Plant Pathology at
Cornell University in Ivy League
「理学修士」取得編
◎目次

Summary　はしがき　*1*

Introduction　序　　*8*

第１章　コーネル大学大学院へ　準備から留学決定まで　*17*

第２章　いよいよコーネル大学大学院へ留学　*72*

第３章　初めてのセメスターは大学後期専門教育課程レベルの「３百番台」のコースワーク（授業）履修と英語の特訓　*96*

第４章　初めての冬休み、修士論文の研究実験開始へ　*171*

第５章　専攻決定とその専攻の規定に則った大学院生対象の「７百番台」のコースワークを履修開始　*181*

第６章　初めての夏休み　*227*

第７章　２年目の秋のセメスターは副専攻「分子生物学植物病理学」のための「７百番台」コースワーク履修のセメスター　*242*

第８章　植物病理学科の大学院生必須のコア・コースPL PA 702履修の春のセメスター　大西洋をひとっ飛び、春休みは憧れのパリ　*276*

第９章　２年目の夏休み　列車で大陸横断、オレゴン州ポートランドの学会参加　*302*

第10章　菌学主専攻にするためのコースワークと初めてのTA（ティーチング・アシスタント）ニューヨークのきのこ狩り　*317*

第11章　冬休みを利用してヨーロッパへ「卒業旅行」*350*

第12章　修士課程最後の春のセメスター　他の学科で開講している「６百番台」の大学院生対象酵母菌遺伝学と留学生のための論文を書く英語のコースワークの履修　*353*

第13章　Ph.D.コースへの夏　カナダのモントリオールでの国際学会に参加　*394*

あとがき　*402*

参考文献等　*405*

㊟　当時の Department of Plant Pathology は現在では School of Integrative Plant Science の Plant Pathology and Plant-Microbe Biology Section になっている。また３桁だったコースの難易番号も４桁になっている。

㊟　Mycology の訳として、「菌を対象とする科学」という意味に近いときには「菌学」、「菌の分類学」（taxonomy）という意味に近いときには「菌類学」という訳を用いた。

Introduction　序

“Yes，I can.”「やればできるぞ」と言われた大学受験ラジオ講座の英語松山正男先生の言葉、「やってみい」という少林寺拳法の宗道臣開祖の言葉、「習わずにあれこれ言うは愚かなりけり」という茶道の言葉に後押しされ、「何が何でも、アイビー・リーグで学位を取るぞ！」そんな夢を実現し、コーネル大学で学んで、学位を取得した。

以前、留学体験記を書いたので出版できないかと出版社に企画を持ち込んだ。「留学した人たちは、皆が皆、外国の大学の教育は日本の大学教育より優れているという一本調子で、つまらない」という理由で却下された。それが一般的な事なら、なぜ日本の大学教育を海外の大学教育並に「優れた」教育にするような努力がなされていないのだろうか？　と思った。そもそも、日本で活躍している研究者の中で、正規のアメリカの Ph.D.「博士」の学位を取得している研究者は極わずか。海外の大学院でどのような教育がなされているのかということを、本当に知っている人たちが、日本国内に何人いるのだろうか？　と疑問に思った。このとき、多くの人たちに自分の体験したコーネル大学大学院の教育の実情を紹介し、多くの人にアイビー・リーグのひとつの大学での大学院教育の実際を知ってもらわなければならないと思った。

FIFA ワールド・カップの 2014 年のブラジル大会。期待していた日本チームは、予選リーグ最下位という屈辱的結果で終わってしまった。「優勝」という目標を口にしながら、実際に得られた結果は、予選リーグ最下位。「井の中の蛙」という言葉が脳裏をよぎった。同じようなことが、大学や大学院という高等教育で

起きていると確信している。「グローバリゼーション」と言いながら、世界の大学や大学院で実際に学位を取って世界で活躍している日本人は少ない。世界の大学や大学院の教育からかけ離れた「鎖国」状態になってはいないか？

さらに、2014年の春になって持ち上がった理研のNature誌に掲載されたSTAP細胞の論文のニュースを見聞きし、教育界で「グローバリゼーション」が騒がれる中、主著者の母校早稲田大学が博士の学位を授与した論文審査にまで疑問が向けられた。公表された論文は、主査、副査になっている教授達、共同執筆者たちは目を通しているはずである。「草稿を提出してしまった」という著者の反論に「そうですか」と応じてしまうような審査体制にも不備があった事を認めなければならないだろう。日本の研究機関や大学、大学院はこんなことで良いのかという疑問を持った。

コーネル大学大学院の教育を一言で言い表すと“Reasonable”「理にかなう」であると思う。これは、アメリカの規範でもある。「質の良いものが高価なのは当たり前」という事である。質の良い教育はその授業料も高いのが当たり前。高い授業料を払って、質の良い教育を施せない場合には、学生や大学院生が黙ってはいないだろう。教える側も、教わる側も、「質の良い教育」を求めてせめぎあっているのだ。では、お金持ちしか質の良い教育が受けられないかというと、そうではない。奨学金制度が充実しているので、優秀な大学生や大学院生は皆何らかしらの奨学金をもらって、年間何百万円という授業料を免除されている上に、生活費ももらって勉強している。優秀な人材に、質の良い教育を受けさせることも“Reasonable”「理にかなう」のである。

もう2年前になるが、2012年春にSMAPの草彅剛主演の『37

歳で医者になった僕』というテレビドラマが放映された。このドラマの原作である小説『研修医純情物語』の著者川渕圭一君は、僕の親友である。川渕君の書いた、このシリーズの小説のひとつ『ボクが医者になるなんて』に登場する「親友のサトシ」という人物は、私がモデルになっている。気仙沼で高校教師をしていたとき、留学を決意した。川渕君が気仙沼にふらりと海水浴をしに遊びに来て、砂浜で海水浴をしながら、川渕君が医学部を受験することと、自分が留学するというお互いの決心を打ち明けたときのことが描写されている。宮城県気仙沼市という田舎の町で留学の準備をして、アメリカ合衆国東部の名門大学グループであるアイビー・リーグのひとつコーネル大学大学院で学ぶことになった。

「留学したい」という念願の夢が叶い、いざ、コーネル大学大学院で「留学生生活」をしてみると、日本の大学の大学生の生活とはだいぶ違うと思った。日本にいても、日本の大学院で大学院生がどんな日常を送っているか、一般の人たちにはわからない。大学院での教育は、まるでブラック・ボックスのように思う。ましてや、海外の大学の大学院での日常生活などは、はるか「雲の上」のできごとのようなものだと思う。このような現状がわからなければ「グローバリゼーション」なんて語れない。

私が留学していた1990年代はバブル経済の絶頂期からバブルの崩壊の時期だった。コーネル大学で有名なホテル経営大学院へ日本全国の有名ホテルの幹部候補生が企業派遣されてホテル経営学修士の学位を取得しに来ていた。さらに、日本では取得できなかったM.B.A.経営学修士を取得しに企業から派遣された日本人が多かった。残念ながら、私が所属していた理科系の学部では、中国からの留学生、台湾からの留学生、韓国からの留学生はたく

さんいたが、日本からの正規の留学生はほとんどいなかった。日本人も何人かいたが、そのほとんどが「短期交換留学生」、「客員研究員」という立場で、コーネル大学の正規の教育とは距離のある存在だったように見えた。正規の学生、大学院生として入学し、しっかりしたコースワーク（授業と実習）で構築されているコーネル大学の教育を経験し、厳しいサバイバル・ゲームのような毎日の勉強に耐え抜いて学位を取得した者でなければ、コーネル大学の教育は語れない。

例えば、コーネル大学では、1コマ「50分間」の授業の、一週間の授業のコマ数が単位数になる。教授が教壇に立って教授する授業の受講と、TA (Teaching Assistant、ティーチング・アシスタント) が指導する少人数の演習、実験等への参画でみっちりと指導される。個人個人の資質が磨かれるような、マンツーマンに近い教育が可能になっている。

最も徹底していることは客観的で公平な「評価」であろう。コースワークという教授法の中で、短期間の教授内容の大学生や大学院生に対する教科内容の定着を測るテスト、レポート。ハーバード大学ロースクール（法科大学院）の生活を描いた小説、映画『ペーパー・チェイス』に描かれているように、学生と大学院生は、次から次へとテストを受けるような日常になる。すべてのテストが厳密に採点されて受けた者に返却される。受講者が大人数の場合にはTAと教授が協力して、厳密さを保つ。結果が必ず返却されることで、受講している大学生や大学院生へフィードバックして、さらに教授した内容の定着を促す。逆に、学生や大学院生がどれくらいの点数を取れるかという事で、教授の教授法に対する評価でもある。

授業には「難易度番号」が付いていて、大学生も大学院生も

同じ授業を履修できる。ただし、同じ授業を履修した場合、大学生の合格基準点は60点、大学院生は80点。ひとつでもこの合格基準点“Standard”に満たないで、“Credit”「単位」を落とすと、即“Kick Out”「放校」になる。よく言われるように「出るのは厳しい」。“How are you?”と挨拶されて“Surviving.”「居残っているよ。」というのが、大学院生の挨拶だ。大学院生にとって、この「合格基準点は80点」というプレッシャーはとてつもなく大きい。また、大学院へ進学を考えている学部生(Undergraduate)は難易度番号の高い授業で、高得点を目指して、必死に勉強している。

博士にあたるPh.D.を取得するためには、大学院のカリキュラムでコースワークを履修し、必要な科目の単位をとって、コーネル大学では“A exam”、一般に“Qualification Examination”とか“Candidacy Exam”と呼ばれる「博士候補生資格試験」に合格しなくてはならない。論文を提出して、論文の審査だけで「博士」を取得できる日本の「論文博士」など、考えられない。現にコーネル大学は、日本で「論文博士」にあたるような学位や「名誉博士」のような学位は出していない。

大学院を“Graduate School”即ち、「卒業生の学校」と呼んでいる。コーネル大学の主役は、教授でもなく、“Undergraduate”と呼ばれている大学生でもなく、“Graduate Student”「大学院生」なのだ。まるで、小学校の様な「毎日授業でびっしり」の頃に戻ったような厳しい教育、これがアメリカ式なのかと思って書き進めていると、コーネル大学“Cornell University”という大学がとても個性的な大学であることが分かって来た。

コーネル大学の大学院で学んでいる期間は、大学院での教育を

「全身で浴びる」というような実感があった。こんなふうに実感できる大学って世界のどこにあるだろうか？

人里離れたニューヨーク州のフィンガー・レイクス地方のカユガ湖を望むイサカ市の丘の上にある、森と湖の囲まれた2,300エーカー（約9,300ha）の壮大な美しいキャンパス。農業関連の実学の教育を中心にしたニューヨーク州立大学とリベラル・アーツ（教養学部）の教育を中心にした私立大学が混在する、きわめて珍しい大学である。さらに、南北戦争当時の「モリル・グラント法」によって出来た大学で、アイビー・リーグに入った唯一の大学でもある。（数学はSustainabie Campus Cornellより引用）

世界で最も美しいと言われているコーネル大学イサカ・キャンパス全景　University Photography 提供

2013年のデータによると、“Faculty” 教授数1,628人、“Undergraduate Student” 大学生が14,393人、“Graduate Student”

大学院生（“Professional”を含む）が7,200人、合計23,221人。大学のあるイサカ市の人口が約３万人で、そのほとんどがコーネル大学関係者である。“College Town”、「学都」と呼ぶにふさわしい環境である。（数字は大学のHPから引用）。

動く遺伝子“Transposon”「トランスポゾン」を見つけてノーベル賞を受賞したDr. Barbara McClintock バーバラ・マックリントック博士が学び、自分が使った高等学校の生物の教科書に出ていた、ウレアーゼを単離し、結晶化して酵素というものはタンパク質であることを発見したDr. James Sumner ジェイムス・サムナー教授が教えるなど、コーネル大学に関係した40名以上の人材がノーベル賞をもらっている。今年（2014年）のノーベル化学賞受賞者３名のうち、２名がコーネル大学Ph.D.だ。

この夏（2014年夏）話題になった、蚊が媒介するデング熱のように、昆虫を媒介して疫病が伝播するということを世界で初めて解明したDr. Theobald Smith セオバルド・スミス医師もコーネル大学の卒業生（1881年）である。

私が留学していたときには、宇宙に関する啓蒙科学書『コスモス』を書いて、テレビ番組も担当し一躍有名になった宇宙科学者カール・セーガン教授が教えている大学、映画『スーパーマン』でスーパーマンを演じて、乗馬の事故で身体不随になった悲劇の映画スター、クリストファー・リーブ氏の卒業した大学ということで有名だった。私が大好きなミュージカル『ウェスト・サイド物語』の原案や映画『追憶』の脚本を書いた脚本家アーサー・ローレンツ氏もコーネル大学卒業生だということを在学中に知った。

しかし、やはり、コーネル大学といえば世界でも珍しいホテル経営大学院で有名である。少し前まではコーネル大学の日本国内の同窓会長もされていた帝国ホテルの犬丸一郎元社長。最近では「星野リゾート」の星野佳路社長らを輩出している。「神戸屋」、「アンデルセン」といった国内のパン屋さんの文化を引っ張っているのもコーネル大学の出身者である。

かと思うと、ベストセラーになっている坪田信貴著『学年ビリのギャルが1年で偏差値40上げて慶応大学に現役合格した話』で紹介された「コーネル式ノート」というコーネル大学の教授が開発されたノートが市販されていて、その名前を目にする。

1865年に創立されたコーネル大学は、2015年に創立150周年を迎える。

そんなコーネル大学の大学院での、大学院生の生活を思い起こして書いてみた。高等学校で9年間の教師として「教育」の現場を経験したことがある私の「コーネル大学大学院」での大学院生生活の奮闘記である。事実は小説より奇なり！

コーネル大学大学院で教育を受けた私から見ると、日本の大学や大学院の高等教育は「鎖国」状態である。「グローバリゼーション」とはほど遠い。日本から多くの学生や大学院生が海外の大学や大学院へ留学し、正規の海外の高等教育で教育を受けて、正規の学位を取得してもらいたい。そして、海外の学位を取得し、海外の大学や研究所でポスドクというトレーニングを積んだ彼らを日本の高等教育がしっかり受け入れて、グローバリゼーションの原動力にしなければ、この「鎖国」状態は崩壊しないだ

ろう。ブラック・ボックスのような大学院教育。パンドラの箱を開けよう。さあ、留学しよう！

世界でトップのホテル経営大学院とその実習ホテル
「スタットラー・ホテル」
University Photography 提供

第１章
コーネル大学大学院へ　準備から留学決定まで

◆ One meeting in a life time　一期一会

それは、ある夜。ひとりの友人との出会いから始まった。

1985年４月１日。大学を卒業してすぐに就職し４年間勤めた群馬県から、宮城県気仙沼高等学校に生物の教師として赴任した。理科という教科を教えていて、宮城県には出身大学があり、学生時代を過ごした仙台と共通する風土で、暮らしやすく、教えやすかった。同じ高校に大学の少林寺拳法部の先輩が同僚として勤務していたし、周囲に大学時代の仲間がたくさんいた。小さいながらも気仙沼支部道院（道場）にお世話になり、少林寺拳法の修行を続ける事が出来た。宮城県へ移って、群馬県では小さくなっていた自分が、再び自分らしさを取り戻し、自己実現を始めようとしていた。

宮城県の最北端、岩手県境にある港町気仙沼は、東京や仙台からも離れていることもあり、独自の文化が育てられていると感じた。気仙沼から東京や仙台の大学に進学して、卒業して戻って来ていた地元の若者たちがいろいろな活動をやっていた。地元の男子高校の気仙沼高校と女子高である鼎が浦高校（現在は統合されて共学校の気仙沼高校になっている）の卒業生を中心にして、気仙沼の学校に転勤して来ている先生達も巻き込んで、演劇の好きな人たちがグループを作って、「気仙沼小劇場」という素人劇団を旗揚げしていた。

この気仙沼小劇場の公演を見て、主演の女の子、しかも彼女は地元のケーブルテレビ、気仙沼テレビの美人アナウンサー！　に一目惚れしてしまった。気仙沼は小さな町である。その彼女が、たまたま自分が教えていたクラスの生徒の親戚だったということもあり、気仙沼市南郷にあった喫茶「ベルボン」でお茶をした。そのとき「井上先生も、一緒に演劇やってみませんか？」と、その彼女に誘われて、次の公演の準備の為の会議に出席させてもらった。皆と舞台の上に立ち演じたり、裏方で舞台を作り出したり出来ると思うと、中学校時代演劇部だった自分は、わくわくするような気持ちだった。

私が見た公演の反省会から会議が始まった。出演者と集まった関係者のひとりひとりが、公演の反省と、次回へ向けての抱負を述べた。ひとりの中学校の先生が、「アメリカのニューヨークの美術学校に留学し、来春は気仙沼を離れるので、これが最後だ」と言う発言をした。どんな風に留学するのか聞いてみた。

「特約退職」という話を聞いた。宮城県の公立学校の教員には「特約退職」という制度があって、一度退職をしても一定の期限以内なら、希望すれば優先的に復職できる制度だという。この中学校の先生は、美術の先生で、ニューヨークの美術大学へ願書を出したら受け入れてくれることになったので、この特約退職で「行って来る」という話だった。

このとき、自分も「特約退職」で、アメリカの大学の大学院へ進学してみようと思った。「何が何でも、アメリカへ留学するぞ！」

まさに、この時、夢だった「海外留学」が夢でなくなった瞬間だった。

◈ Master's Degree and Teacher's License　修士の学位と教職員「専修」免許

この頃、ちょうど教職員免許法の改正の動きがあった。それまでの「１級」と「２級」という名称を「普通」と「専修」にしようとする動きだった。私は大学卒で「学士」の称号を有していたので高等学校２級免許だった。この改正により、「普通」免許になる。大学院修士課程を修了し、「修士」の学位を有していれば「専修」免許になる。組合は、そのうち給与まで差がつく、差別だということで反対した。

大学を卒業したときに、大学院に進学しないで、現役で教職員採用試験に合格し、高等学校の教職員になったことが、なんとなく後ろめたく思った。あのとき大学院へ進学して、少なくとも修士だけは取得しておけばよかったという後悔の念を持った。自分のように大学を卒業して教職員採用試験に現役で合格して教えている教師が「普通免許」で、大学を卒業して採用試験に落ちて、しかたなく大学院へ進学して、大学院修士課程で修士を所得して、さらに教職員採用試験を何年か受験して、何年か合格することができず、「教職員採用試験浪人」して、やっと合格して教壇に立った教師が「専修免許」というのが、どうも癪に障った。東北大学卒業生が多かった気仙沼高校の教員の仲間内でも「名前を聞いた事も無いような私立の大学の大学院を出ているからといって『専修免許』で、旧帝国大学系の国立大学を卒業して現役ですぐに教員になった自分たちが『普通免許』ってのは、変だよな」

という声が聞かれた。

負けず嫌いの性格の自分は、海外へ留学をしないまでも、国内留学でも良いから大学院に進学してみようかなと思っていた。修士を取得して、「専修免許」に格上げしたかった。そんな中、気仙沼で、夢の海外留学と、「修士」を取るという実益が重なって、“Yes, I can.”「やれば、できるぞ。」という気持ちが強まった。

だめで、もともと。アメリカの大学の大学院へ志願書を出してみて通らなかったら、そのまま宮城県の高校教師である事には変わらない。やらなくて後悔する事の方が、やってだめだったと後悔するよりもダメージが大きい。「やってみい」という少林寺拳法宗道臣開祖の言葉が頭の中に響いていた。

◆ Good Suport　最も必要なのは周囲の協力

留学を決意したときに校長室を訪れて学校長に決意を伝えた。また、学校長の推薦状を気仙沼高校の学校長にお願いした。「何をバカなことを考えているのか？」と叱責でもされるかと、校長室を訪問して恐る恐る話を切り出した。話を切り出したところ、学校長は、「すばらしい」と逆に賞賛してくれた。推薦状は英文で書かなければならないので、学校長に書いて頂いた和文を、英訳して学校長のサインをいただくことにした。

次に学校長に呼ばれて校長室を訪れると、「特約退職」の話をして下さった。普通、産休、育休を取り終わった女性教諭がもうすこし育児に専念したい場合に、この制度を利用して、一旦退職

して復職する制度だと説明して下さった。自分のアメリカの大学の大学院への留学は、何と言っても当時の気仙沼高等学校長の理解と協力があったからこそ出来たのだと感謝している。

アメリカの大学の大学院へ留学するために最も大切なものは、周囲の人たちの理解と協力かもしれない。アメリカの大学の大学院で修士を取得して帰国したら、宮城県教育委員会に報告し、自分の教職員免許を普通免許から専修免許に格上げして、宮城県の教職に復職するという将来設計もできた。

◈ Hard to Be Accepted　アメリカの大学院は入るのも難しい

日本でいう「大学生」は、アメリカでは“Undergraduate”「卒業前学生」という。エリート集団であるアイビー・リーグの“Undergraduate”は、専門を学べる“Graduate School”への進学を目指す。日本では、医学部にあたる教育は“Graduate School”と同等の“Medical School”、法学部にあたる教育は“Law School”で行われるので、“Undergraduate”は真剣に、“Graduate School”や“Graduate School”レベルの専門大学院への進学を目指して、猛勉強をするのである。

文科系の頂点は、Harvard University ハーバード大学の Law School「法科大学院」か、Yale University イェール大学の Law School「法科大学院」、理科系の頂点はハーバード大学の Medical School「医学大学院」であろう。

アメリカの大学院へ行くには、ひとつひとつの大学の大学院を受験しに行く必要は無い。ほとんどの大学の大学院が、以下の書

類の審査で合否が決まる。

1　Graduate Point Average (GPA) 単位総平均付き Transcript 大学の成績証明書
2　TOEFL スコア（母国語が英語でない学生の場合）
3　Gradate School Admissions Tests（GRE 等の試験）のスコア
4　Recommendation letters 推薦状　３通
5　Essay エッセイ（志願理由小論文）
6　１年間の資金を証明する書類（預金通帳のコピー等）

これだけの提出書類で、大学の求める「条件」を満たすスコア（点数）や志望動機がそろえば、大学院への入学が許可される。

これらの中で、“GPA”「大学在学中の成績」が大きな比重をしめている。医学系大学院、法科大学院、大学院を目指すアメリカの大学生は、いかにして高い GPA を取るかが、大学院レベルの学校への進学においての鍵を握るので、大学在学中の４年間は必死に勉強する。日本の大学入学試験の受験勉強も、受験生は必死であるが、「一時」の勉強である。大学院を目指すアメリカの大学生がこなす４年間の平素の勉強に比べたら、エベレスト山登頂と富士山登頂の差ぐらい差があるように見える。

GPA を重視できるということは、「評価」が客観的、公平で厳格であるということでもある。アメリカの大学で与えられる「単位」（Credits）は、取るのに大変な労力と時間を要するので、「単位を取る」＝「よく勉強した」ということに直結するような仕組みになっている。成績表を見れば、その学生が大学在学中にいか

に頑張ったかがわかる。

さらに、大学院へ志願する場合、その進学先の専門に応じて、日本の大学へ入学願書を出すときの「センター試験」と同じような「共通試験」を受験しなくてはならない。

医学大学院の場合	Medical College Admission Test (MCAT)
法科大学院の場合	Law School Admission Test (LSAT)
一般の大学院の場合	Graduate Record Examination (GRE)

このように、それぞれのGraduate School Admissions Tests「共通試験」を受験して、成績を志望大学へ提出する。

アメリカの場合、Harvard UniversityのMedical SchoolやLaw Schoolを頂点とした大学院への進学に向けて、Undergraduate（大学生）達は、在学の４年間、必死になって勉強する。日本の大学入学試験よりも過酷ではないかと思われるような競争と、猛烈な勉強を要求されるように思う。

よく「アメリカの大学は入るのは簡単だが、出るのは難しい」と言われる。私の実感では、「アメリカの大学の大学院は入るのも、出る（学位を取る）のも難しい。」コーネル大学大学院で、コースワーク（授業）を履修して、「単位」（Credits）を取ることが、こんなにハード、厳しい、難しいことかということも体験した。

◆ My English　英語の力

宮城県の気仙沼市内や仙台市で受験できる英語の資格試験をいくつか受けてみた。英検１級は２回不合格だった。1987 年春に準１級が新しくできた。グッド・ニュースだった。早速受験すると、合格。英検準１級の第１回合格者になった。TOEIC のスコアは 775 点だった。国連英検 A 級にも一発で合格した。国連英検の２次試験のネイティブの試験官との面接では「中国で天安門事件が起こっているが、国連は何をするべきだと考えるか？」と質問されて、「天安門事件は中国国内の事件なので、国際機関である国連は干渉するべきでは無い。」と答えたことを覚えている。天安門事件が起こったのが 1989 年、今年 2014 年はあれから 25 周年にあたる。

ついでに受験した「TOEFL のスコア（点数）」が 550 だった。私が調べたホームページの換算表では、この時私が受験した TOEFL の形式は“PBT”という形式で、“550”というスコアは 677 満点の 550。300 点満点の CBT という形式で“217”、120 点満点の“iBT”という形式では“81-82”、TOEIC では“740”のレベルであるとされる。“550”というスコアであれば、アメリカの大学、特に理科系の大学院に入学するのは可能なスコアだった。アメリカの大学の大学院へ留学が、現実的なものになって来た。コーネル大学大学院に入った後に分かったことだが、コーネル大学大学院の理科系の分野では“550”未満は TOEFL のスコアがけで「足切り」をしているらしい。“550”というのは、ギリギリ、セーフだったようだ。

自分は決して特別な英語の勉強をしたわけではない。中学校で

学んだ英語、高校生時代に学んだ英語、高校のときに学校の授業、大学入学試験受験のための勉強、大学の教養部で学んだ英語だ。それまでに学んだ英語の集大成のような TOEFL のスコアが 550 だった。よく言われるように、英語は「言葉」であり、コミュニケーションの道具に過ぎない。自分の本業は、高校生物の教師であり、専門は大学の卒業論文のために学んだ植物病理学だ。

◆ “Rome was not built in a day.”「ローマは一日にして成らず」

自分の英語は、留学のために「にわか作り」で学んだ英語ではない。それまでの基礎ができていなかったら、留学準備のための英語の勉強をしても到底留学可能なレベルには到達しなかっただろう。

もっとも基礎的なことは、中学校のときに通っていた私塾で学んだ。自分が役に立ったと考えていることは二つある。ひとつは、発音記号の読み。もうひとつは、中学校の教科書の暗唱とディクテーションだ。私が中学校に通っていた頃は中学校では発音記号を、力を入れて教えてくれなかった。発音記号を教えると、難しくなり返って逆効果という英語教育界の意見だったらしい。辞書を引いて、発音記号を見て、しっかりした発音ができることが基本の「キ」だ。

「中学校の教科書」をしっかり勉強することも基本。中学校レベルの英語の文法を理解できないと、その先には進めない。もちろん、学校での英語の勉強をおろそかにしていたわけではない。私塾での勉強が「予習」と同じような効果をもたらし、学校で学ぶ英語がよく理解できた。

自分の英語は「和文英訳」とか「英文和訳」ではないと思う。自分の英語の勉強というより、トレーニングは、中学校の時から、英語のインプットと、インプットした英語の文章のアウトプットだ。日本語から英語を結びつけるのではなく、「言いたい事」を直接英語に結びつける。授業は週に何時間かであるが、暗唱、ディクテーションに向けて、毎日、手と口を動かして暗唱、暗記していた。「書きながら、暗唱する。暗唱しながら、書いて覚える」、これを毎日繰り返す。これが自分のスタイルだ。仙台市の文具メーカー中田物産株式会社から売り出されている『ドクターホッキーの秀才文具パック』の考案者東北大学の堀切川一男教授の調査によると、「秀才仲間や優秀な学生の多くの人が高確率で」、このような勉強法をしているらしい。自分も東北大学出身だから、まんざら嘘でもないと思う。

そして、「マンツーマン」のコミュニケーション力をつけるような指導と学習が英語上達の鍵だと思っている。ラッキーだったことは、私塾でも学校でも、良い英語の教師に巡り会えたこと。さらに、教育実習で来た中学校の先輩で、英文科の美人の女子大生に刺激されたこと。自分の通っていた中学校は、国立大学教育学部の附属学校だったので、その大学の教育学部の学生たちが教育実習にやってくる中学校であり、教育実習生の実習は年中行事であった。しかし、その先輩女子大生の英語の教育実習生は違っていた。東京の津田塾大学の英文科に在学していた。教職課程で教育実習の単位を取得するために、母校の中学校へ教育実習にやってきた。私たちのいるクラスで英語を担当することになり、彼女が実習していた２週間の間、私達生徒に「教科書の暗唱」のトレーニングをした。休み時間、昼休み、放課後に、彼女のところへ行き、覚えて来た教科書の文章を暗唱するというものだっ